

JSQC ニュース No.225

発行 社団法人 日本品質管理学会 東京都杉並区高円寺南1-2-1 (勸日本科学技術連盟東高円寺ビル内)
電話 03 (5378) 1506 FAX 03 (5378) 1507 ホームページ: <http://jsqc.i-juse.co.jp/E-mail:jsqcapp@a1.mbn.or.jp>

第2回世界ソフトウェア品質会議

(2 W C S Q : The Second World Congress for Software Quality)

—Software Quality for the Coming New Millennium—

インテック・ウェブ・アンド・ゲノム・インフォマティクス 河合 清博



第2回世界ソフトウェア品質会議(2 W C S Q : The Second World Congress for Software Quality)が、2000年9月25日から29日にかけて、パシフィコ横浜の横浜国際平和会議場で開催された。そもそもWCSQは、日科技連のSPC(Software Production Control Committee)の委員長だった菅野文友先生が、10数年前世界に向かって提唱され、EOQ(ヨーロッパ品質機構)、ASQ(アメリカ品質協会)の賛同を得て実現したものである。

それだけにWCSQは、数ある世界会議の中でも特別の意義と価値のある会議であろう。WCSQは5年ごとにアメリカ、アジア、ヨーロッパの順で開催されることとなっている。第1回は1995年6月サンフランシスコで開催された。第2回が今回の横浜で、第3回は2005年パリでの開催が決まっている。

今回の2 W C S Qの出席者は、国内603名、海外117名(国と地域は29)であり、参加者の主な内訳は、欧州44、北米15、韓国27、中国15、インド6、台湾5であった。発表論文数は、オーラル・セッションとポスター・セッションを合わせて128件もあった。5年前の1 W C S Qの出席者246名、(国と地域は21)、論文数60件と比較してみても、いかに2 W C S Qの規模が大きかったかお分かりいただけるであろう。

まず本会議に先立って25日午前中、チュートリアルが開催された。9つのテーマで実施され、参加者は予定していた約2倍の375名にも達し、直前に大きな会場に変更するという、うれしい誤算があった。25日の午後からレジストレーションの受付、明日からの発表に備えてチェアパーソンとスピーカーの打ち合わせとウェルカム・カクテルが行われ、いやがうえにも明日からの本会議への期待を盛り上げた。26日からの本会議は、パシフィコのメインホールにおけるオープニング・プレナリーから始まった。地元横浜市長など来賓挨拶の後、飯塚先生、Tom Gilbのキーノート・スピーチと続いた。午後から本会議の主目的である、オーラル・セッション、ポスターセッションが開始された。今の時代を反映して、「プロセス変革と品質」や「新しい品質パラダイム」などの発表が多かった。夜にはSIG(Special Interest Groups)があり、80数名の参加があった。10個のテーマに分かれ、それぞれが興味あるテーマのもとに集まり活発な議論と意見交換がなされた。27日は終日、発表であった。また飯塚先生、Tom Gilb, Francois Nazelleという豪華メンバーでのパネルディスカッションもあった。夜のバンケットは国内90名、海外60名の参加であった。歓迎の尺八と琴の演奏で始まり、ビンゴで大いに盛り上がった。圧巻だったのは市長命で横浜まで駆け参じて下さった陸前高田市の方々

の和太鼓演奏だった。ホテル全体を揺るがさんばかりの迫力に、海外の方々は何度肝を抜かれたのであろう。翌日、事務局に和太鼓の写真が欲しいとの申し込みが跡を絶たなかった。28日は午後3時まで発表があり、引き続きクロージング・プレナリーで、次回パリで開催される3 W C S Qでの再会を誓い、2 W C S Qは幕を閉じた。29日はオプションとして、日本の最先端技術に触れることができる3つの企業訪問コースが用意され、国内14名、海外39名、計53名の方々が参加された。

2 W C S Qがかくも盛大でしかも成功裡に終わったのは、5年も前から準備を開始していただいた組織委員会、実行委員会はじめ各委員会のメンバーのご努力、そして各企業、組織・団体の有形無形の多大なご支援があったからこそであろう。また職務とはいえ、日科技連2 W C S Q事務局の遠藤参事、中西の両氏のご苦勞を忘れてはいけない。なお2 W C S Qの内容と詳細については、富士通の弓田氏が「ENGINEERS」12月号に報告されているので、そちらをご覧ください。

2 W C S Qの会議テーマが、「Software Quality for the Coming New Millennium」であった。関係者一同は、本会議が来る1000年のソフトウェア品質への第1歩となってくれることを心から願っていたし、2 W C S Qはその期待に違わず、その礎となってくれたと言っても過言ではないだろう。



「品質」誌、投稿論文の募集!

会員の方々からの積極的な投稿をお勧めします。投稿区分は、報文、技術ノート、調査研究論文、応用研究論文、投稿論説、クオリティーレポート、レター、QCサロンです。

「品質」誌編集委員会

私の提言

ISOと品質パフォーマンス

(株)NTT-MEコンサルティング
取締役 福丸 典芳

現在ISO9000シリ

ーズに関しては、世界で約35万、日本で約1万7000にもものばる品質システムが認証されている。しかし、これをうまく活用している企業は数%にも満たないのではないだろうか。

このようなことも一つの背景として、ISO9000シリーズの改訂が行われようとしている。今回の改訂のキーワードは、顧客満足と継続的改善になっているが、企業がこの規格をうまく活用できなければ、どんなに良い規格が制定されようが無用の長物となるのではないかと危惧する。すなわち、ISOを使うということは、導入しただけの効果がなければ経営として意味をなさないと思う。このため、経営者は、どのようにしてこの規格をうまく活用し、経営に役立たせようとするのかについての方針を明確に社内外に示す必要がある。

一方、ISOの要求事項だけで品質パフォーマンスが改善されるわけではないことを認識する必要がある。なぜならば、規格の要求事項は最低限実施すべきことを定義しており、それを具現化する方法論については規定されていないからである。したがって、品質パフォーマンスを向上させるためには、この方法論の改善が必要となってくるので、企業が考慮すべきこととしては、この規格の意図するところを十分理解し、企業にとってどのようなマネジメントシステムを構築するのかを明確にする必要がある。構築にあたっては、有効性と効率について考慮しなければならない。例えば、品質を作りこむための手順にムダ、ムリ、ムラがないかといった点についてプロセスの検討を行うことが基本となる。また、品質パフォーマンス改善のためには、品質データ収集し、統計的手法に基づいて分析し、改善を進めるといった改善のPDCAのサイクルを回すというプロセスを行うことが、有効性と効率について改善を進めることになる。したがって、このようなプロセスは、日本企業が進めてきた品質改善に関する方法論の原点であり、すでに企業内に根付いていると思われるが、今回の改訂による品質マネジメントシステムの再構築を機会として、品質管理の原点に返った活動を行うことによって、ISOを活用して品質パフォーマンスの改善を進めることにより、ISO取得の意義が出てくるのではないかと思う。

事業案内

●第22回クオリティパブ

日時: 2001年1月30日(火)18:00~20:30
会場: 勸日本科学技術連盟・東高円寺ビル
テーマ: 近江商人とその経営思想

—本物を求め続けた近江商人—
ゲスト: 嶋 和雄氏 東レ㈱生産技術第2部
定員、会費、申込方法: 第23回共通

●第23回クオリティパブ

日時: 2001年3月2日(金)18:00~20:30
会場: 勸日本科学技術連盟・東高円寺ビル
テーマ: マイクロソフト、ルーセント他のTQM事情
—米国優良企業を訪問して—

ゲスト: 坂 康夫氏 NEC品質推進部長
定員: 30名
会費: 会員2,000円 非会員2,500円
準会員・学生一般1,500円(含軽食)
申込方法: 氏名、所属、連絡先を記し本部宛(FAX03-5378-1507)お申込みください。

●第266回事業所見学会(本部)

日時: 2001年2月1日(木)13:30~16:30
見学先: サンワテック㈱
テーマ: 品質管理活動を支える20代社員中心の若い企業集団

定員: 40名

参加費: 会員2,500円 準会員1,500円
非会員3,500円 学生2,000円
当日払い

申込締切: 1月22日(月)

但し、定員になり次第締切ります。
申込方法: 同封の参加申込書に所定の事項を記入のうえ、お申込みください。

その他: 継続的専門能力開発(CPD)の実績を証明いたします。詳細はニュースNo.214参照。

第263回事業所見学会(関西支部)ルポ
ユニバーサル・スタジオ・ジャパン
(第三工区建設工事共同企業体)

来年４月の開業を目指したユニバーサル・スタジオ・ジャパン（USJ）の建設現場を見学することができた。時は７月５日、JR環状線の西九条駅で桜島線に乗り換え、終着駅の桜島駅前に50名余りが炎天下の中集合した。目の前にはUSJ(新駅ユニバーサルシティ駅と桜島駅間)の建設現場が広がっていた。

USJとよく比較されるTDL（東京ディズニーランド）のコンセプトが子供向けの「夢とおとぎの国」だとすると、ここUSJは「冒険と未来の国」つまり大人が楽しむところのようだ。入場者数は年間約1千万人を目標にしている。

工事は中央部の大きな池を取り囲むように工場跡地約55万㎡を３つに工区割した「建設工事共同企業体方式（38の建設業者）」で運営されている。南側の第1工区が大林組、第2工区を鹿島建設、そしてこの度見学した第3工区は竹中工務店が中核となっている。第3工区は全体の約3割を占める北側部分、そこにはUSJ139棟数のうち、82がある。同工区の北外郭には4千台収容能力のある駐車場も別にすめられていた。

工期は年末完成を目指して今がピークだという。ここで約25百人（米国人約百人）が働いている。固定物は日本で調達していたが、遊戯本体は全て米国で製造しているという。呼び物の一つ「ジョーズ」や「巨大な恐竜」は既に完成しており最終点検に入っていた。大火炎を吹き上げて一番恐怖感をあおる複雑な装置の前では写真撮影が厳しく禁止された。

施設全体、特に建物や岩石に「古色」が強く意識されていた。「古色」という設計標準は数値管理が難しく官能検査的であったため膨大なサンプルが要求されたという。たとえ日本で完成した技術があっても米国式が指定されるなど、随所に米国の知的所有権が徹底されていたことに驚きを覚えた。九州のハウステンボスが「古色」を意識しなかったことから欧州の古い街並みの良さが演出できていないと建築学会の指摘を思い出す。

この地は古くは弥生文化(魏志倭人伝)ころから、近くは江戸時代の堺をみても外国の文化を取り入れてきた。ゆえにUSJ

も単に遊戯目的だけでなく新世紀の文化の一つに育って欲しいと思った。

田川正則（三宮ターミナルホテル）

第77回講演会(中部支部)ルポ

第77回（中部支部第35回）講演会が7月14日(金)南山大学瀬戸キャンパスで開催された。参加者は71名であった。

本行事は、オペレーションズリサーチ学会中部支部、日本経営工学会中部支部との3学会共催行事である。今回で8回目の開催となる。共通テーマを“情報技術と社会”とし、3学会がそれぞれ招待講演を依頼する形で企画された。講演者ならびに演題は以下のとおりである。

□(QC) 黒岩 恵氏（トヨタ自動車㈱）：“情報システム高度化による自動車産業の構造転換”

□(JIMA) 飯島正樹氏（愛知学院大学）：“米国における日系企業のサプライチェーンマネジメント”

□(OR) 後藤邦夫氏（南山大学）：“南山大学瀬戸キャンパスのコンピュータネットワーク”

□(OR) 長谷川利治氏（南山大学）：“Intelligent Transport Systemについて”
黒岩氏は、すべての“こと”がスピード化する21世紀における製造業のビジネスへの取り組みについて“情報加工業”であるという認識をもつことが重要であることを力説された。

飯島氏は、氏が昨年度に行ったサプライチェーンマネジメントを主要テーマとした米国日系企業の視察成果を報告された。米国でのJIT生産の問題点などを指摘された。

後藤氏は、新学科（総合政策学部、数理情報学部）設立に伴い、氏が中心となって設計された南山大学瀬戸キャンパスLANについてデモを交えて講演された。

新キャンパスはPCをいつでもどこでも（食堂でも）使える環境である。

長谷川氏は、ITSとは何か？その制御目的は何か？について、ORの考え方から解きほぐした解説をされた。現状の認識のもとで、ITS関連事業はマルチメディア産業の中でも再有望視されてよいのか、を問題提起された。

講演会終了後は、同キャンパス内学生会館で懇親の場をもった。

最後に、今回の幹事学会であるOR学会

中部支部、および鈴木敦夫先生（南山大学）に謝意を表したい。

仁科 健（名古屋工業大学）

第264回事業所見学会(中部支部)
オーエスジー(㈱)八名工場 ルポ

さる9月5日(火)に第264回事業所見学会が愛知県新城市のオーエスジー(㈱)八名工場にて「八名工場におけるTPM活動について」をテーマに28名の方々が参加して行なわれた。

オーエスジー(㈱)は昭和13年タップの工場として設立され、現在ではあらゆる産業分野で必要とされる切削・転造工具を専門に製造し、世界の各国に販売している。また、CSを第1として、お客様に喜ばれる製品とサービスの提供により世界のモノ造り産業への貢献を目指し、ABC活動(Advanced(先進の)、Business Method(ビジネス手法)、Create(創造))とTPM活動を推進している。

八名工場は創業製品であるタップ専門工場として1990年に操業し、1996年10月にTPM優秀賞第1類を受賞され、受賞後も活動を継続している。また、1998年12月にはISO9001も認証取得された。

概要説明では、①地球会社：グローバルな活動②健康会社：禁煙活動③環境にやさしい会社：ISO14001の活動など地球企業を目指した内容で大変感心した。

工場見学では、切削加工工場でありながら製造ラインの床には油や切り粉の付着もなく、あいにくの雨にもかかわらず油の浮遊もない大変PMが行き届いているという印象であった。これは後の質疑・応答の中で、局所カバーによる油浮遊防止などの設備改善の成果であるという説明があった。工場の特徴として自社手配設備率が60％と非常に高く、自社ノウハウがそれぞれの設備に詰まっていることが伺えた。

工場見学後の質疑・応答では、切削油対策や切削工具の品質管理についての討議が活発に行なわれ、もっと質疑・応答の時間が欲しいという参加者の方がおられたほど盛況であった。

人にやさしい5Sの行き届いた生き生き職場を実現された工場であり、切削加工職場のありたい姿とは何かを垣間見ることができた大変有意義な見学会であった。

山下恭幸（ヤマハ発動機）

社日本品質管理学会第30年度事業計画

2000年11月28日現在

月		H12年	10月	11月	12月	H13年	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
事業																
研究発表会											第67回 26日(土)		第68回中部		第69回関西	
年次大会・通常総会			第30回 28日(日) 明治大学 (お茶の水)													第31回 26・27日 山梨大学
講演会									第78回関西	第79回中部		第80回中部	第81回関西			
ヤング・サマー・セミナー													第9回			
シンポジウム									第80回本部				第81回中部 第82回関西		第83回本部	
事業所見学会	本部							第266回 1日(火)		第269回		第272回				
	中部					第265回		第268回		第271回		第274回				
関西							第267回		第270回		第273回		第275回			
クオリティバブ			第21回 21日(火)			第22回 30日(火)		第23回 2日(金)		第24回		第25回			第26回	
その他の事業											第25(金) 30周年記念					
理事会			第320回 17日(火)	第321回 28日(火)	第322回 19日(火)		第323回 13日(火)	第324回 13日(火)		第325回 22日(火)		第326回 17日(火)		第327回 25日(火)	第328回 16日(火)	
庶務・会員サービス・規定 会計・合同委員会			12日(火)	17日(金)	12日(火)		6日(火)	6日(火)		15日(火)		10日(火)		18日(火)	9日(火)	
「品質」誌 編集委員会	A		18日(火)	16日(木)	21日(木)	25日(木)	26日(月)	22日(木)	19日(木)	23日(木)	21日(木)	25日(木)	23日(木)	19日(木)	18日(木)	
	B			10日(金)	14日(木)		7日(火)	23日(金)		16日(木)	27日(木)		22日(木)		3日(火)	
事業委員会			3日(火)	29日(火)	18日(月)	16日(火)	20日(火)									
広報委員会					8日(金)											

新規研究会を受付ます

研究開発委員会では、本年度に設置する新規公募研究会の申請を受け付けます。奮って申請してください。

とくに若手会員を主査とする研究会を歓迎いたします。

研究期間：平成13年4月～平成14年3月（1年間）

申請方法：「新規研究会設置申請書」を事務局へご請求ください。

申請書にご記入のうえ、郵送で本部事務局宛にお送り下さい。

申請締切：平成13年2月8日(木)必着

なお、来年度（平成13年10月～14年9月）新設の研究会については、平成13年6月に申請を受け付けます。

研究会の申請と運営：

○研究会の申請にあたり、申請者は共同研究者（学界、産業界）を8～10人位事前に働きかけて集め、申請書に記入する。理事会承認後JSQCニュースでメンバーを公募する。

○研究目的と年間の研究会活動計画案を作成する。

○1研究会のメンバー数は20人まで。

○会場は原則として日本科学技術連盟東高円寺ビル会議室。

○時間は18時～20時。ただし会場の都合がつけば午後でも可。食事支給。

○研究会運営費は1人1回当たり1,150円（内訳：通信費、資料代、食事代）ただし年間開催数は11回を限度とする。

2000年11月の入会者紹介

2000年11月28日の理事会において、下記のとおり正会員25名、準会員2名の入会が承認された。

（正会員）25名

○玉井徹夫(ボッシュブレーキシステム)、○大野 晋（日立ソフトウェアエンジニアリング）、○オ茂康彦(イオナインターナショナル)、○秦 寛正（タカセ）、○古山富也(日本規格協会)、○鈴木政弘(電気安全環境研究所)、○大西 淳(住友重機械工業)、○高橋靖照(建材試験センター)、○城所武男(小松フォークリフト)、○古藤判次郎(小島プレス工業)、○落合浩史(キリンビール)、○須賀 弘(フェニックスリスク総合研究)、○塙 凡夫(日本検査キューエイ)、○千葉徹也(防衛調達基盤整備協会)、○福永紘一(日本自動車研究所)、○覺幸英樹(三菱プレジジョン)、○倉光 豊(太田昭和センチュリー)、○永沼誠昭(日本環境認証機構)、○嶋田一生(東電工業)、山崎一正・渡辺 篤(新日本製鐵)、○加部隆史（エラン）、○平岡一二三(日本品質保証機構)、○小林真一（日本電気）、○岡村 宏（芝浦工業大学）

（準会員）2名

○渋谷智希（東京大学）、○玉谷雄介（中央大学）

正会員：2598名

準会員：122名

賛助会員：185社、209口

公共会員：21口